

※ウェブサイト『稲賀繁美研究室』での掲載は123頁までです。

# 「表現」と自由

## 第5章

◆ 稲賀繁美 (京都精華大学国際文化学・元学部長)

1957年生まれ。比較文学比較文化、文化交流史の研究者。東京大学、同大学院卒、フランス政府給費留学生・パリ第7大学博士号。三重大学助教授、国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学教授を経て、現職。著書『絵画の黄昏 エドゥアール・マネ没後の闘争』(1997年、名古屋大学出版会)でサントリー学芸賞、渋谷・クローデル賞特別賞他を受賞。

## 表現におけるステレオタイプ

今回は、「表現」と自由、あるいはそこに前提として潜んでいる「模倣する自由」について考えていきたいと思います。似顔絵、カリカチュア、パロディといった、本人・本物があるものに対して、どこまで表現することが自由なのか、という問題です。

似顔絵のときに問題にあがるのが、ステレオタイプです。例をあげると、大学の学食で、「サコ先生おすすめ定食」と表示するのに、サコ先生の似顔絵が掲示されました。でも、サコ先生から「全く私に似ていない、単なる黒人のステレオタイプだ」と指摘がありました。私は異文化交流が専門ですので、ステレオタイプとは何か、ここから考えてみたいと思います。

ステレオタイプとは認識の問題です。似ている、似ていない、サコさんだと分かる、いやこれでは分からない、これなら理解できる、これでは理解できない、というレベルです。しかし、人間には感情がありますから、そのステレオタイプの認識がフィルターとなって、感情に結びつきます。すると、分かるものはいいけど、分からないものは嫌い、という好き嫌いの感情になってしまいます。そして、それは簡単に良し悪し、善悪にくつつきます。分かるものは正しい、分からないものは正しくない。これらが全部癒着してしまうのが問題です。

そして、正しいものは生かしてあげよう、正しくないものは殺してしまおう、というところまで暴走することもあります。本来は、認識、感情、行為は別々のものなのに、癒着してしまるのが危ないのです。

第4章で吉村先生が紹介した手塚治虫の『ジョーを訪ねた男』は、いま見たような短絡がどう発生するかを描いていて、大変な名作です。黒人のステレオタイプを巧みに利用して、人種差別の欺瞞とそこに隠された心理とを見事に暴き出した短編です。

少し飛躍しますが、ハリウッド映画にどうしてスペース・オペラものが多いのかおわかりですか。『スタートレック』とか、『スター・ウォーズ』や『E.T.』とか、宇宙人を題材にした映画のことです。なぜあんなにたくさんあるのでしょうか。実は、黒人、白人、黄色人といった「人種」が違うけど分かり合おう、という物語でないとポリテイカル・コレクトネスに合格しないんですね。宇宙人という設定にすると、悪玉にしたり、善玉にしたり、仲良くしたり、いろいろと操作できるのです。まさに、理解できない人をどう理解するか、というテーマが「宇宙人」を題材にすると、「人種問題」をうまく回避して「表現」できる。

ところで、現在はタイパ（タイムパフォーマンス）が横行して、映画を勝手に縮めた「ファスト映画」が流行っています。視聴者は人気の映画やドラマの話題に乗るために、ネタバレ

レ部分を集めたファスト映画を見るわけです。これは一種の複製ですけど、海賊行為、法律違反で、逮捕されて裁判になる可能性もあります。2022年には、権利侵害だとして、配信者が数億円の罰金を払わなければならぬ訴訟事件が発生しました。

### 盗作と翻訳が起こす問題

手塚治虫さんが晩年にパリで講演を行ったとき（1985年7月）、私もパリにいたのでお手伝いしたことがあるのですが、「自分の作品の海賊版がたくさん出回っている」と、講演の席で大変怒った発言をあえてなさいました。当時は日本の文化産業が無断で盗用され放題でした。イタリアから入って、ヨーロッパ中に広まっていたのです。

日本のマンガやアニメでは、女の子の髪はモノクロ版だと白で表現されるので、ヨーロッパの人から見たら、金髪と思うわけです。主人公を白人だと思っていて、日本人だとは思わないんですね。コマに漢字が書いてあっても、ヨーロッパ人は漢字を知らないから、その作品が描かれたのが日本どころか、東洋ということすら分からない。だから80年代に日本アニメはヨーロッパ中に広まりました。当時は盗用し放題です。でも、手塚さん自身はパクリとは無縁かといったら、彼はハリウッドやディズニーの大ファンだから、それを使っている。

お互いに貸し合いっこしているわけです。デイズニーの『ライオン・キング』（1994年）はミュージカルにもなって大人気ですが、原型が手塚さんの『ジャングル大帝』（1966年）であることは有名な話です。

手塚治虫さんのマンガ『ブッダ』は世界中で読まれています。日本のマンガの右ページから左ページへ読むというスタイルが最近まで欧米で理解されていなくて、そこから問題が生じました。ヨーロッパ語圏のように左ページから読み始めて、最初にラストを読んでしまう間違いが多くあったのです。そこで、マンガを英訳するときに行われたのが、絵の左右反転です。左から右へ読むように変えたわけです。80〜90年代までごく普通に行われていた手法です。そこで問題が発生します。お分かりでしょうか？

『ブッダ』のなかで、右手と右手で握手するイラストが、反転されて、左手と左手で握手するイラストに変換されてしまったのです。イスラム教徒にとってもヒンドゥー教徒にとっても、左手は不浄とされていますから、これはありえないことです。実際にこのマンガの英訳がインドに渡って、政治問題にまで発展しました。手塚治虫さんには全然責任はないわけです、ちゃんと右手で描いたのですから。ただ翻訳されただけで、宗教的タブーを起こしてし

まうことになった。となると、表現は自由といっても、翻訳という手立てを一つ加えることで、不自由になるどころか、一部の人たちの権利をも侵害してしまうことになるのです。

こうした宗教と表現の自由の問題は、いろいろなところで起こります。サルマン・ラシュディの小説『悪魔の詩』（1988年）も、当時イスラム教を冒瀆ほうとくしているとして、大論争になりました。イランの最高指導者ホメイニー師はラシュディらに死刑宣告し、1991年には日本語訳をした筑波大学助教授（当時）の五十嵐一ひとしさんが殺害されました。表現の自由は神への冒瀆につながるとか、宗教上の禁忌（タブー）に触れたから殺されのだ、といった論調のマスコミもありました。実際には、五十嵐さんは禁忌に抵触しようとか、表現の自由を守らなくてはいけない、という主張をするために、この小説を訳したわけではありません。これについては私も英語・フランス語も含めて論文を書いていますので、参照してください。この事件は、もう30年も経って時効になったと思っていたのに、つい最近、2022年8月に、ニューヨークでラシュディが刺されました。「芸術における表現の自由」という講演をしようとしていたところでした。

マンガ家やデザイナーなどいろいろな表現者を目指すみなさんに覚えておいてほしいのは、自分が善意でやったことでも、思いもよらぬところから、こうしたとんでもない誤解や反感

を招くことがあるということです。このような「不自由」な場面に我々はいくらでも遭遇します。他人事ではないのです。

### 表現は自由なのか不自由なのか

2019年8月に名古屋のあいちトリエンナーレで「表現の不自由展・その後」が行われ、その続編として、2021年7月に「私たちの『表現の不自由展・その後』」があり、大変な議論になりました。芸術の自由、表現の自由が守られるべきなのに、制限を受けて自由に表現できなかった作品がある、その「不自由さ」を扱おうとする展示自体が問題とされ、展示できなくなりました。ジャーナリストの津田大介さんが芸術監督となり、慰安婦問題、天皇と戦争、植民地支配、憲法9条、政権批判などタブーとされがちなテーマも扱われましたが、名古屋市長の河村たかしさんが「陛下への侮辱を許すのか」とデモをする一方で、「まるで戦前の検閲」とプラカードを掲げて反発する人もいて、さまざまな議論を呼びました。ここではその逐一には深入りしませんが、なぜこういう問題が起きるのか、別の角度から考えたいと思います。

【講義録】第5章 「「表現」と自由」ウスビ・サコ編『不自由な社会で自由に生きる』  
光文社 光文社新書1269 2023年8月18日 117-143頁

※ウェブサイト『稲賀繁美研究室』での掲載は123頁までです。  
124頁以降は、書籍をご覧ください。